

2019/02/03

## 「主の弟子になる」

### ■主は称賛を求めない

「あなたがたが多くの実を結び、わたしの弟子となることによって、わたしの父は栄光をお受けになるのです。」(ヨハネ 15:8)

神は、あなたが主の弟子になることを望んでおられます。あなたは弟子になろうとしているのでしょうか。そうではなく、主の観察者となり、ただ主を称賛する者になっていないでしょうか。

イエス様をほめたたえることは、イエス様との間に距離を置くことです。あなたは本当に親しい相手とつき合う時、ずっと相手をほめたたえて過ごすでしょうか。イエス様をほめたたえる時、私たちはイエス様を観察する立場に自分を置いています。しかしイエス様は、観察される方ではありません。むしろ、私たちが主のことばに対してどのように生きているのか、ご覧になる方です。

旧約時代の幕屋での礼拝は、大庭から聖所、至聖所へと進み、主に近づく様子を表していました。主をほめたたえるとは、大庭で賛美するだけで中に入ろうとしないようなものです。しかし、イエス様が望んでおられるのは、称賛ではなくイエス様に近づくことです。

イエス様はこの地上に来られた時も、称賛されることを拒否しました。人々はイエス様がイスラエルをローマから解放し、国を再興する王となってくれることを期待して迎え入れようとした。しかし、イエス様が選んだ道は、最も貧しい者になり、ありとあらゆる苦しみを負って人々と一緒に苦しむ道でした。イエス様は、迫害され、十字架に架けられて殺される道を選択しました。

人はイエス様のようになりたいと願いながらも、とても同じようには生きられません。あくまで自分の生活を守った上で、主について行きたいと願うのです。そこで、称賛によって距離を作り、ただイエス様を観察する者、傍観する者であろうとします。しかし、主の弟子になるとは、イエス様を観察して称賛する者になることではなく、キリストに倣う当事者になることです。クリスチャンには二つの選択があります。それは、キリストを称賛する者になるのか、キリストに倣う者になるのかという選択です。

イエス様を称賛した人々は、イエス様が王になってくれるという期待が裏切られると、今度はイエス様を殺すことを望みました。十字架に架けられたイエス様を称賛する者は、誰ひとりいませんでした。イエス様が復活なさった後も、ローマ帝国の激しい迫害のため、誰もイエス様を称賛することはできませんでした。そこで弟子達は、称賛ではなく、イエス様に倣う者になることを目指したのです。これが主の弟子を目指すということです。

しかし、イエス様に倣う者が増え、クリスチャンが力を持つようになると、クリスチャンを取り巻く環境が変わりました。キリスト教がローマの国教になり、イエス様の素晴らしさ

をたたえる音楽が生まれ、絵画が生まれ、世の中で成功するクリスチャンも大勢生まれました。すると人々は、このような人達を立派なクリスチャンだと評価するようになったのです。その結果、人々は主に倣う者ではなく、主を称賛する者を目指すようになり、主の弟子になろうとする人達はわずかになってしまいました。

クラシック音楽もゴスペル音楽も、本来は主を賛美するためのものです。しかし、それらが世に広まり、それで成功することで人々から素晴らしいクリスチャンと言われるようになると、多くのクリスチャンは人から評価されるクリスチャンになろうとするようになりましました。しかし、私たちが目指すのは、あくまでも主に倣う者です。

主を賛美してはいけけないではありません。しかし、イエス・キリストは、自分の絵を描いてくれとも、私のために歌ってくれとも、言われませんでした。ただ「私のところに来なさい」と言っておられます。そうしないことが問題なのです。神が私たちに望んでいるのは、称賛する者ではなく、主に倣う、主の弟子になることなのです。

## ■主の弟子になるとは

### 1. 自分の現状に目を向ける者になる

「わたしはまことのぶどうの木であり、わたしの父は農夫です。わたしの枝で実を結ばないものはみな、父がそれを取り除き、実を結ぶものはみな、もっと多く実を結ぶために、刈り込みをなさいます。」（ヨハネ 15:1-2）

「実を結ばないものは父が取り除く」とありますが、「取り除く」という言葉は、本来「支える」「持ち上げる」「かつぐ」という意味の言葉です。そして、「実を結ぶために刈り込みをする」とは、自分の苦しみに目を向けることを表しています。それは、平安という実を結んでいるかどうか、自分の現状に目を向けるということです。主をほめたたえる者は自分を見ません。しかし、主の弟子は自分を見ます。

イエス様は人になり、私たちと同じ苦しみを背負ってくださいました。神が人になるとは、永遠である神が有限になる、つまり、死ぬものとなることです。これが、人の背負う苦しみです。死は、私たちからすべてのものを奪い取ります。どんなに長生きしようと、何を手にしようと、すべて消えていきます。すべての人がこの不安のゆえに見えるものに安心を求めるといふ罪を犯します。人に期待したり、目標を設定して達成感を得ようとしたりすることの本当の目的は、人から慰めを得るところにあります。人は皆愛されることを求めているのです。それは不安だからです。この現実を目を向けることが、主の弟子になる始まりです。自分が死ぬものであるという現実を認め、死に対して不安を抱き苦しんでいるという現実を認めることが、主の弟子として生きる最初のステップです。

人は「死」という不安、苦しみに逃げようとして、人の中に安心を求めようとしてしまいます。イエス様は、「死」を背負っても苦しみに逃げようせず、罪を犯すことはありません。

せんでした。しかし私たちの不安・苦しみはわかってくださいます。

「自分に目を向けよ」とは、「医者になろうとするのではなく病人になれ」ということです。あなたを見ているのは神であり、私たちは病人という当事者です。自分から目をそらし、神を傍観する者であってはなりません。これに気づいて自分の現状に目を向けることが、主に倣う、主の弟子になるということです。

## 2. キリストにとどまる者になる

「あなたがたは、わたしがあなたがたに話したことばによって、もうきよいのです。わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。」

(ヨハネ

15:3-5)

自分に目を向けると、不安や恐怖を感じます。ですから、イエス様は次に「私にとどまりなさい」と教えています。それは、「私から慰めを得なさい」ということです。ぶどうの枝は、ぶどうの木から栄養分をもらいます。そのように神につながって神から慰めを受け取るのです。不安や恐怖を感じると、私たちはそこから逃げたくなり人に慰めを求めたくなります。しかし、それでは主の弟子になれません。

称賛するものは自分も称賛されることを求めます。周りから称賛されることは、大変心地よく、おおいに心が慰められます。しかし私たちは、人の称賛ではなく神の慰めを求めなくてはなりません。

イエス様は、神の言葉をふさぐ最大の敵は世の心づかいだと言われました。つまり人から称賛を得ようとする心です。そして、次の敵は富の惑わし、つまりお金による安心だと言われました。それらのものに心を向けず、神から安心をもらうことが神にとどまるということです。

イエス様は、苦しみから逃れようとするのではなく、そこに身を置きました。苦しみに身を置いたイエス様はたいへんよく祈られました。祈ることで神にとどまったのです。そしてそこから神の慰めを得ていたのです。これがキリストに倣う生き方です。

イエス様は、人から称賛されることを嫌い、病人をいやした際も、「私がしたことは黙っていなさい」と言っておられます。

人に慰めを求めると人を恐れるようになります。そうすると、自分自身をどこかに置き、人の要求に応じて生きていかなければなりません。自分を生きようとする時、私たちは神の

慰めを必要とします。神にとどまり、神に祈り、神からの慰めを受け取ることが必要なのです。それが主の弟子です。

イエス様が弟子達に対して最後に行なったことは、弟子の足を洗うことです。それは、神の慰めを受け取ることの意味します。つまり、弟子になるとはイエス様の慰めを受けることなのです。ペテロははじめ、イエス様に足を洗ってもらうことを拒否しました。なぜなら彼はイエス様を称賛していたからです。称賛する者は裏切ります。しかし、「わたしが足を洗わなければあなたとは関係がない」とイエス様に言われて、ペテロは自分の足を差し出しました。これは、あなたを罪から洗いよめて慰めるのはわたしだということの意味しています。主にゆだね、足を差し出して洗ってもらう者が主の弟子なのです。

### 3. 神に求める者になる

「あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。」(ヨハネ 15:7)

イエス様はどんなことも父なる神に祈り求めました。十字架に架かる前には、「この杯を取り除けてください」と祈り、十字架の上では「この人々を赦してください」と祈りました。

イエス様は、あなたも神に求める者になりなさいと教えておられます。ただし、このことが3番目に語られていることに注意を払いましょう。つまり、「あなたが神にとどまる者となり、実を結ぶようになったら、何でも欲しいものを求めなさい」と、教えられているのです。

以前の私たちは何を求めていたのでしょうか。世の中で成功することであり、その目的は自分の慰めを得ることです。

しかし、神にとどまり実を結ぶようになったら、すなわち、主の弟子になったなら、祈りが変わります。自分は神から慰めを受けているので、世の中の成功や自分が慰めを得ることに関心がなくなってしまいます。そして、他の人にも神の慰めを受けてほしいと願うようになるのです。主の弟子になると、このように人を愛する生き方に自然に変わっていきます。パウロは、人々が神の慰めを受けられるようになることを願い、次のように言いました。

「私はすべてのことを、福音のためにしています。それは、私も福音の恵みをともに受ける者となるためなのです。」(I コリント 9:23)

主の弟子になるとは、神に求める者となることです。そしてそれは、すべてのことを福音のためにしたいという願いです。どうすれば一人でも多くの人に神のことばを伝えられるか、常にこの願いを持って祈り、すべてを福音に結びつけるようになり、このようにして、人を愛するようになるのです。

主の弟子は、神の慰めを受け取っていますから、人から慰めを受ける必要がありません。

何のために生きるのか、それは人から愛されるためではなく、神の福音を届けるためです。神の慰めを受けて御霊の実が育つと、誰でも自然とそのように変わっていきます。イエス様は、そのように願う人たちに対して、何でも求めなさいと勧めておられるのです。

イエス様の生涯は、人を慰め、神の福音を伝える生涯です。主に倣う者になるのか、主を褒め称えるだけの者になるのか、その最終キーワードは福音です。あなたの人生は何のための人生でしょうか。消えてなくなるもののために人生を使うのではなく、いつまでも残るもののために使いましょう。人々から称賛されて地上で豊かに生きることだけを目指してはなりません。なぜなら人生は有限の世界に完結するものではなく、永遠だからです。永遠は有限を飲み込み、地上での差は永遠の中では消えてなくなります。

私たちはすでに永遠のいのちを持っていますが、今は友としての神が見えていません。しかし、神様は、私たちを友と呼んでおられます。あなたは友と、ほめたたえるだけのつき合いをするのでしょうか。主と共に生きる者にとって、称賛すればするだけ、神と距離を置いていることになります。神の慰めを受け取り、神の手足となって福音を伝える生き方を目指しましょう。